

郷土誌だより

いまむら

第 2

編 集

今村誌編纂委員会

発 行

今村誌刊行会

瀬戸市平町 3-142

電話 (84) 0840

コミュニティセンター内

みんなで作ろう今村誌

今村誌編纂委員会

私達が今住んでいるこの土地はどのような過去を辿って来たのだろうか。先人たちはどのように生き、後世の我々に何を残していったのか……。

私達がふだん何気なく見ている風景の中にも、ごく自然に受継いできた生活の中にも、いわゆるお上や学者の編纂した歴史には到底取り上げてもらえないような小さな歴史の数々が刻みこまれているにちがいない。お上が目もくれなかつたこのささやかな、そしておびたしい、庶民の生活に密着して流れてきた歴史というものをふり返ってみることは大切なことであるし、こんな、放っておけばいつのまにか消えてしまいうような、小さな人文の歴史でもそれはそれなりに、そこに生きついできた者でなければ記録できない部分を沢山もっている筈である。

私達は、そんな部分にもできる限り光を当て、拾い集め、今村という地域とそこに生きた先祖たちの生いたちや歩みの記録を、「今村誌」という一冊の本にまとめよ

うとしていくわけである。

折角、苦勞して作る本なら一人でも沢山の人に読んでもらえような本にしたいと念願するのは当然のこと、そのためには、肩のこるような難かしいものではない。さし絵や写真や図表なども沢山入れて、平易なわかりやすいものにしなければならぬ。一方で

はできるだけ中味の濃いものにし、たいという気持も当然、働く。そのためには、一人でも多くの人のお力を借りなければ出来るものではないし、多くの人々の手で作られてこそはじめてその地域に密着した、「生きた歴史」としての価値もでてくるというものだ。

「道は人の歩いたあとにできるものだ」と魯迅は言った。が、それと同時に、道とは先人の歩いたあとを辿り返すものでもある。先祖たちの歩いて来た道と、次の時代へとつなぐ道の接点に、ここに生きた人々の暮らしの歴史を根として、ここ今村の、地べたから生えた一基の記念碑のような、そんな本を作りたいと思う。

私達はこの本を、何とか、向う二、三年位で完成させたいと願っている。この意味からも、一人でも多くの方々からご協力、ご教示をいただきたい。

こんな、私たちの仕事を少しでも沢山の人に知ってもらい、力を貸していただくためのよすがになればという願いをこめて、情報交換の場としての機関紙、郷土誌だより「いまむら」を発行することにしました。そんな狙いから、本紙は、その本が完成するまでのあいだ、奇数月中旬に発行していくつもりである。

すでに、本紙創刊号を出して一ヶ月目にもう、協力を約束して下さった方々がある。

例えば效範小の水野、山内、高島の三先生、田端町の鈴木三樹、平町の青山光正の両先生などとか長根連区いこいの家に集る人々がそれなら我々も一つ協力してやろうと、テーマを分担して調査や収集をして下さることになった、とか……。分担して下さる方とその

テーマは次の通りである。
鈴木藤一氏 下肥汲取り問題と東部興農会のこと。
青山舜一氏 水車のこと。
青山善一氏 城屋敷のこと。

横山春一氏 民俗資料の収集。

どうか、お手持資料・写真等のご紹介や、ご存じのこと、調べられたことなど、第一段階本紙用として送って頂けると有難い。本紙に発表したり紹介したりした上でやがてまとまる「本」の中へもとり入れさせて頂くことになろうかと思う。その場合は勿論、お寄せ下さった方々のお名前も付記していくよう編集面でも工夫していく方針である。

くれぐれもよろしく御願ひ申し上げます。

あ。り。が。と。う。
ご。ざ。い。ま。し。た。

資料提供者御芳名

次の皆様から貴重な資料をお貸し頂きました。(敬称略)

- 青山謙一 平町一 二点
- 伊藤武男 市場町 三八点
- 矢野倉二 平町二 一点
- 伊藤 哲 高根町一 一点
- 横山春一 西寺山町 十一点
- 早稲田柳右エ門 北脇町 三点
- 須崎好一 尾張旭市 一点
- 瀬戸市歴史民俗資料館
- 瀬戸市立図書館

「心の華」と「今村之青年」

昔の今村青年の機関誌が、西寺山町横山春一さん方に、大切に保存されていた。

その一つは「心の華」と題する

ガリ版手刷り百十頁和綴じの冊子で、第一巻第一号、明治四十四年一月一日発行、東春日井郡旭村今青年会、とある。

内容は「発刊の辞・会長稲垣兼四郎」にはじまり、横山秀巖和尚長江鎌治郎、伊藤浜吉氏の講話横山健一、青山佐太郎、青山忠治横山鍋太郎、伊藤勘三郎、青山銚太郎らの「論説」、詞藻というタイトルで会員たちの文章や詩歌俳句等がずらりと並べられ、巻末に「会報」として会計報告や会則などがついでに載っている。

ここに氏名の載っている人は殆ど故人となられた人ばかりだが、たった二人だけ現存者が見えるので紹介しておこう。一つは短文、一つは和歌である。

◎ 裸風呂 市場支部 三宅久七

松の樹の下に五衛門風呂をわかす。月影が浮く虫が鳴く、妹が松竹梅を書いた行燈をつるす。

「せめて月でも書けば」と云うと「でもお祖父様が書いたの。お客を松、ぬるくば竹、あつくば梅、という趣向なんですって」

◎農村の青年 寺山支部 青山鉄市 山里の門田たがやすひまひまに 文まなぶこそたのしかるらめ

一方、「今村之青年」は創刊号が昭和十年九月発行で、活版十八頁、瀬戸市今村男女青年団発行、編集人青山保、印刷所は名古屋古出来町の日進社となっていて、内容は団の活動報告や、訓話めいたものから会員の文芸作品など盛り沢山で、年代も新しいだけに現存者も多い。創刊号に出ている役員名簿によると団長が玉置 巖、副団長が男青は早稲田柳右エ門と三宅寛一、女青は稲垣朝子と加藤道子で、理事に長谷川金吾、伊藤庄次(何れも当時の教範小教諭)らが名をつらね、編集員に三宅寛一・青山保・横山春一・塚本留一・松原茂・稲垣朝子・青山君江の七名があげられている。

その第四号に瀬戸信理事長鈴木正人さん若かりし頃の美文がのつ

ているので一つご紹介しよう。

奈良の秋 川西支部 鈴木正人 夜來の雨も名残り無く晴れて、小春日和の秋の日は、のどかに地上に投げている。秋風が路傍のブラタナスの一葉を揺動かし、路行く少女の袂をかすめてゆく。サンデーの或一日、古の都、奈良に遊んだ。ザックザック踏み砕く小石の音も、唯なんとなく、しんみりとしていく。池畔の五重の塔は、遠く過ぎ去った昔を回顧するかの様に、たたずんでいる。

お鍛祭と虫送り

矢野清次

今から五十年前位前までは、今頃の季節になると村中が青々とした稲田にそよ風が吹き、夜ともなれば螢飛び交い、何とも言えない風情であった。

七月の中旬になると、年中行事のお鍛祭りと虫送りが八王子神社で行われる。

現在はお鍛祭の神事だけが行われ、虫送りの方は農家も殆どなくなつたため、行われなくなつた。

お鍛祭りは元来、五穀豊饒、家の安全を祈願して行うものだが、現在では商売繁盛家内安全を祈つ

一匹の鹿が通り過ぎんとする我々に何か哀願する様な物憂げな、まなざしで見つめている。釣瓶落ちの秋の一日を遊び疲れて宿に入る。帰る路すがら広々とした草原に斜陽を浴びて啼く鹿の声は哀憐を漂わせ、ひたひた大気の中に波打って居る……。

薄く這う夕霧に余韻を込めて晩鐘の音が……、猿沢のさき波に砕けて行く……黄昏……。 奈良の秋は一人寂しく暮れて行く。(完)

て行われている。昔は毎年七月十日と決まっていたが、今はそれに近い日曜日に行う。

神社には貞享二年(一六八五)五月と銘のある木製の鍛が保存されている。祭りの当日には竹に御幣をつけ、鍛を飾って豊年を祈る神事を行い、神事が終わると御幣をつけた青笹竹を持ち太鼓を叩いて「おーくわさまのおくりよう、一東三把で五斗八升、あとはおかかのまつばりよう」と唱えながら田の畔を一巡りつづ今の共栄通りを東に進み、瀬戸川堤を西へ、水神

様(今の教範橋東の北岸)に到着すると、ここで豊年と水不足のないうちにお祈りをして、更に川西(昔の川西嶋のこと。今の教範町以西)、根の鼻(今の川北町)に出で南へ進み、共栄橋の東から寺山の裏を過ぎて八王子の宮に帰るのである。

昔からこの日の御酒は一斗五升と定められているが、この酒をくみかわして、御幣のついた笹の枝を持って帰宅する。豊作と家内安全を祈り神棚に記るのである。 虫送りについては、お鍛祭の日

に相談してその行事がきめられていた。虫送りには各農家からたい松を持って三郷の境に集り、一斉に火をつけたたい松を持って田の畔を東に進み吉田橋まで来る。

夏の暗夜の青田の中に千点万点螢のとぶよりも華やかな光景は、都会の人には夢想もできぬほど、まさに壮観であった。

種々のすぐれた農産物の出来た今日、害虫駆除の行事としてお鍛祭や虫送りをすることの幼稚さを今の人は笑うかも知れないが、自分の田を愛する精神で村全体の田畑を愛しその豊作を祈る気持は、尊いといふべきではあるまいか。

狐に化かされた話

横山春一



それは、大正四年一月頃の小雪の降る寒い夜更けのことであつた。「狐が鳴いているから起きよ」という母の声で、起きつらかつたが小便を催していたので外へ出ることにした。(便所は殆んどの家が戸外にあつた)「オンガイカラツレテイツテ」と、母と一緒に外に出たら、雪は止んで月が青く光つていた。「シャーシャー」「シャーシャ」と、二秒間位の間隔で鳴いて行く声でした。用をすました、「早く寝よ」といわれ、冷え切つた床に入つた。翌朝、母と原山畑にネギを取りに行つた。母は「たしかこの辺を狐の奴飛んで行つたがなあ」と言ひながら、よく見ると二米位の間隔で足跡が残つていた。犬の足跡に似ていた。大ききも同じ位だつた。

それから数年後の事であつた。当時の若い衆は、一日の労働が終ると灯のない暗い夜道を夜あそびと呼んで、夜毎夜毎娘さんのいる家に行き雑談や農繁期には、もみすりや、土臼挽き、俵つくり等を手伝つて娘さんや親の欲心を買つたりしたものであつた。そんな帰り道、小雨がしとしと降る春先の夜更けのことであつた。高根の方の家で遊んで、長根下の西丸山の小路と寺山に帰る出合いの道まで来ると、黒松の茂つた丸山の細道を、夜目にもハッキリ見える蛇の目傘をさし、流行の和服姿で白

い定首のところから、チラチラと紅い腰巻を見せ近くまで来てクルリと踵を返して寺山の方へ行くので、あの娘さんは誰だろうかと早く追いついて顔を見たいと急ぎ足で追いついたら、トタンに左の松林の中の溜池にドボンと消えた。

現在の長根小学校の西、竹本建設の下あたりをオオホノ崖と呼んでいた。こゝは砂防工事があつたところで、狐の穴が山の中腹にあつた。市場の伊藤万次郎さんの父親が、弘法さまの命日に(大正拾年頃)子狐を三匹捕えて持ち帰り納屋に入れておいたら親狐が毎晩やつて来て戸をたたくので、附近の人々に「タクル、タクル」と言われて気がかゝり、元の穴に返え

したと、伊藤さんは語つていた。その頃、寺山の御嶽さまの信者で青山重吉さんと言う人から色々話を聞いたが、その一つに狐の語があつた。「俺がネズミを由で焼いて畑井戸に吊り下げておいたというのである。そんな話を聞いた幾日かたつて、私は畑井戸へ小鳥の水見に行つて驚いた。その頃尾先白左衛門と言う古狐がいた。その狐の哀れな末路の姿が浮いていたからであつた。(西寺山町)



瀬戸電の歴史



青山隆弘

今、名古屋の都心まで二十数分で行けるセトデン、そもその始まりは明治三十八年三月、瀬戸一矢田間一四、六杆の単線開通でした。当初はセルボレー式蒸気原動車というフランス製三五人乗り、コルクスを焚きチャカボコチャカボコ蒸気で走り、チャカボコと愛称されたという本邦唯一の珍車。こ

れが又お粗末で、矢田まで調子が良くて九十分、一つ間違えば途中でエンコして三時間、四時間もかかつてやつとご到着なんてのはザラでした。会社は瀬戸自動鉄道といつて大曾根に本社を置き瀬戸矢田間の運賃は二四銭でした。明け三九年には大曾根まで路線延長したものの時間はアテにならん。

昭和七年の駅名を見ると、尾張瀬戸・追分・尾張横山・今村・根之鼻・三郷・平池・旭新居・豊石・印場・渡ヶ丘・大森・喜多山・小幡原・小幡・笠寺道・瓢箪山・聯隊前・守山口・矢田・大曾根・駅前・森下・坂下・社宮祠・尼ヶ坂・清水・土居下・東大手・久屋・大津町・本町・堀川と三十三駅ありました。昭和十年頃の瀬戸一堀川間の六ヶ月定期がたつた五七円九八銭といひますからウソみたいな話です。昭和十一年、ロマンシート百人乗りのガソリンカーが美人車掌を乗せて登場し大評判となりましたが、ガソリン禁止令でまもなくパー。

そうこうするうち昭和十四年九月一日、瀬戸電気鉄道は名古屋鉄道と合併して名鉄瀬戸線となり、駅も徐々に間引きされスピード化の基盤も整えられて昨年八月二〇日、乗入れが実現する運びとなつたわけでした。かくて全国鉄道ファンに知られた「お堀り電車」の栄光は幻と消え、代つて冷房付きの快速電車がセトデン七十余年の歴史を脱いで登場し、新しい時代に即した沿線住民の足を引き受けることになつたという次第です。

「連載」

広長公物語 (2)

白 水 郎

現在、瀬戸市城屋敷町の一面に
今村の氏神として鎮座する八王子
神社がある。

尾張志に「今村にあり五男三女
神を祀り天照太神素盞鳴尊を配享
す社伝に文明五癸巳年九月（一四
七三）松原下総守源広長造營すと
いへり、云々」とある。

広長公が今村に居を構えたのが、
寛正年間であるから、城郭が出来
上つて、十年前後に、武運の折廻
と領民の氏神として、此の八王子
社を勧請したものと思われる。

今画はその城構えについて述べ
てみたい。戸田修二氏の記述「日
本城郭全集」等を参考にして城構
を見ると、
八王子神社の西北一帯にあつた
城郭の規模は、径六〇間（約一一
〇メートル）の郭で、周囲に巾五
間余（約一〇メートル）の堀（南
側のみ二重）を巡らしていたとい
う。ほゞ円形の構えは、今にして

城、今村城で、広長公の姓をとつ

その遺構の面影もないが、出口と
か、厩屋敷、お鶴屋敷、紅井戸、
市場、矢の下の呼称が残ってい
る。

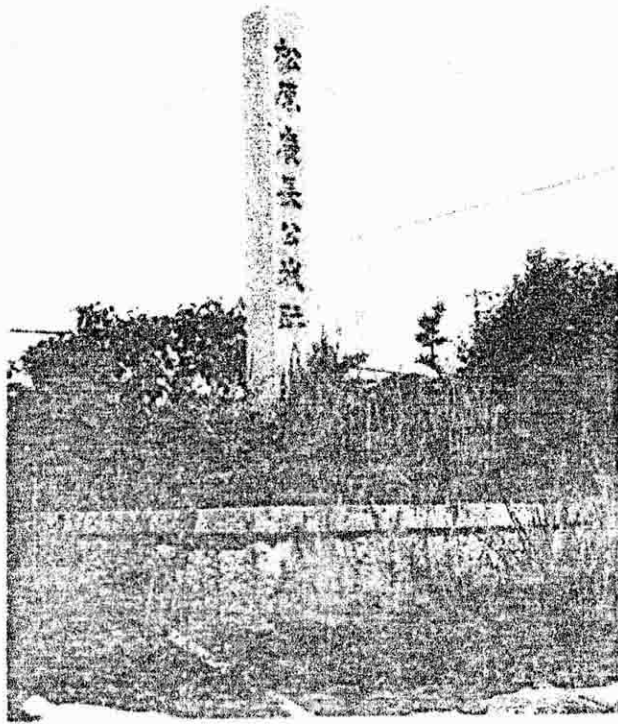
明治十一年（一八七八）に画か
れた村地図（伊藤武男氏保存）に
も、堀や土居、塚等が記入されて
いる事からも推察出来る。

按ずるに、戦国時代、廻々に造
られたと云う、所謂屋敷城とか、
陣城等と言ふ様な、堀を穿つて水
を張り、堀り出した土砂を盛り上
げて土居とし、屋敷兼外敵を防禦
する郭は、当時の領民から見れば
今迄何もなかつた廻に立派な城構
えが出来、氏神として八王子社も
祭祀され、此の乱世にあつて自分
達を守ってくれる主がある、と云
う意識で今村の領民が眺める此の
城郭は、物心両面からして庄巻で
あつた事が偲ばれる。

これこそ松原下総守広長公の居

て松原城とも云つた。
現在それらしいものとしては、
八王子神社の西に道路を隔て、藪
があり、傍に僅かの凹地があるが
それ等が土居であり、堀であつた。
之が唯一の遺跡である。
今から五、六十年位前は土居
も相当続いていたが、昭和初年の
耕地整理の際に姿を消した。
藪の北五、六十メートル位の廻
に松原神社（後述）があつた。
その近く、春夏には緑の草に覆
はれ、冬ともなれば、寒々と枯草

の上に雪を載く幾星霜が過ぎ去つ
たのか、一つの土盛の塚があつた。
耕地整理の時に、松左エ門と
云う人が、一振の刀をその塚の中
から発見した。当時の人達は、刀
の処置に首をかきしげ、相談の拳句
この刀は由緒ありげに思われるの
で、八王子神社へ奉納する事が決
められた。ところが、時は移り、
いつの時代か盗難にあつたのか、
どの様になつたのか、今はない。
刀の行方を知る人も、知ろうとす
る人も今はない。（つづく）



松原城跡の碑（八王子神社裏）

お便りコーナー

○今村誌ができるのは今
村に生れ育つた者として
大変喜ばしいことです。
今日は稲垣善太郎さんの
ことについて書いて送り
ます……（名古屋市緑区
太子一丁目 横山亮一
元愛知県立大学教授）
▼ありがとうございました
た。お送り頂いた原稿は

本の方で活用させて頂きます。
○山巡査の話、繰返し拝読しまし
た。広長公物語は引続き読ませて
頂けるのが楽しみです。郷土誌の
郷の字の良の上の、は何か変に思
えます。この、が削除されればす
つきりとした気持で読めます（西
吉田町三・奥田正七）
▼ご指摘ありがとうございます。
早速お説のように致しました。

求む写真

瀬戸電の根ノ鼻・今村・尾張橋
出等の駅舎の昔の姿をうつした写
真をお持ちの方はありませんか。
ございましたら一度お貸しいた
きたいのです。八四一〇八四の
ミニユニまでご連絡下さい。
その他昔の写真をお持ちの方、ご
一報いただけないでしょうか。

（編集部・隆）